



ドイツはフランスから何を学ぶことができるだろうか：天羽均先生の退職によせて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ペピン, ハンス・ヨアヒム メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00009978

「ドイツはフランスから 何を学ぶことができるだろうか」

天羽 均先生の退職によせて

Hans-J. Pepping

ヨーロッパ市民戦争から誕生した諸国民は、20世紀に入ってもなお、敵か味方かという偏見をたちどころに示すことができた⁽¹⁾。それには、数百年にも及ぶ慣習の中で培われてきた外国的なものに対するイメージばかりではなく、各国民が自ら作り上げてきた自国像も影響を及ぼしてきたのである。過去の世代は、フランス人とドイツ人の「本質」を究めようとして、「合理的」－「非合理的」、「個人主義的」－「民族主義的」、「開放的」－「閉鎖的」、「楽天的」－「規律的」などといった短絡的な対比を用いて描写したが、そのような屈託の無さは今日の我々からは失われてしまった。その余韻はしかしながら、フランスの歴史家Jacques Le Goffの唱えるヨーロッパ文化主義の中に残っている。彼はヨーロッパ文化に「批判的精神」を望み、そのような精神の下では、自由と懷疑の理念によって非合理的主義的な感情に陥ることが回避できると考える⁽²⁾。敢えて声を大にして言うまでもなく、Le Goffにとっては、批判的精神の故郷はフランスに求めるべきであり、また非合理主義的な危機は、必ず中部ヨーロッパ地方からやって来るということは分かりきったことなのである。しかしながら、この著名な歴史学者の意見はいささか一方的で、もしかしたら先入観に捕らわれたものではないだろうか－そんな疑問が頭をもたげてくる⁽³⁾。そこで本文ではこのテーゼを追いかけ、特徴的な例を手がかりに一國家に対する考え方と照らし合わせながら－再検討していくことにする。そこで、近代史、及び現代史におけるあらゆる試練の中で、フランス人が自国の意義をどう考えているのか、フランス人と国家との距離は大きく開いたものであるのか、そして、フランス人は自身と国家とを同一視し、また国家に誇りを抱

くことができるのかどうか、ということを考察していきたい。

共和国誕生の時に誓われた革命とは裏腹に、フランスを支配していた極めて保守的な空気は、外国人にとって(とりわけドイツ人にとっては)、奇異に感じられるものであった。1926年には、Friedrich Sieburgが、大きな波紋を呼んだ悪評高き著書*Gott in Frankreich?*(この懷疑的な疑問符はドイツで慣用句にまでなったタイトルの主要成分である)の中で、近代性と、それに伴うフランスとドイツのメンタリティーの隔たりを提示している。即ち、なおも農業色の濃いフランスと、産業の道に進んだドイツとを対比させたのである。もっとも、このドイツ人歴史家は、こうした隔たりを徹底して肯定的に受け止めており、一愛情に満ちた揶揄的な調子ではあったが一本心では密かに感嘆していたのである。突然に始まり、屈辱的な敗北に終わった戦争体験からフランス人は免れた。フランスは、世界に自国の立場を主張する十分な理由を持っていたのである。ここでは、Vichy政権によるCollaboration現象については除外しておく⁽⁴⁾。

自分達の歴史に対するこうした誇りは、特にその後、フランスが植民地帝国(Empire colonial)の夢を断念した時代に、de Gaulleによって再び火がつけられた。Georges Pompidou, Giscard d'Estaing, François Mitterandの政権の下、また現在では再びJacques Chiracによって、植民地を失ったフランス政治の努力は常に、国民の利益をいかに有利に内外に主張するかという目的に向けられた。多くのドイツ人と対照的なのは、その際フランス人の高級官僚達が何の良心の呵責も感じていないという点である。自己疑念というものは、フランス政治にとってほとんど縁のないものなのだ。共和国と人権に対する誇りが一つのコンセンサスを構成し、それが全政党(右翼は例外として)を包括しているのである。こうした意味において、1989年フランス共和国の「Bicentenaire(200年記念祭)」が祝われた。7月14日、Champs Elysées(シャンゼリゼ通り)の軍隊パレードによって最高に輝かしい形で演出されたように、「La République」の自画像には何の自己疑念の翳りも見られないである。La Défenseの凱旋門、Louvre宮殿のピラミッド、そして新しい国立図書館

コラボラシオン

の姿の中に、彼らの圧倒的な文化と精神的産物の遺産を築き上げようとするフランス人の決然たる態度に、訪れたドイツ人は羨望の入り混じった驚きを感じずにはいられなかった。というのも彼らは、ベルリン再興を掲げながらも、遅々として進まず、時には恥ずかしいほど覇気のない決定進行の様子に慣れっこになっていたからである。フランス人が自分達自身、そして国家を表現するやり方には、国粹主義的な色はまったく見られない。そこにあるのは、ただ誇りのみである。自己疑念というものはフランス人にとって無縁のものであるように思われる。従って、アカデミー・フランセーズだけでなく、国家までもが、フランス語が「Franglais(フラングレ)」に墮落しないように目を光らしているのは当然ともいえよう。厳格な規則の下でも、ことばは成長し繁栄することができる。従って驚くべきは、現代フランス語に取り入れられているイギリス語法が、ドイツ語のそれと比べてドイツ語はストリート言葉やコンピューター英語によって「宇宙人語」に退化してしまったーはるかに少ないということである。いかにフランスの知識人達が、フランス社会の歪みを指摘しようとも、－そのような指摘はVoltaireによって知識人の課題と定義づけられ、FoucaultやBourdieuによって、現代に至るまで義務として理解されているのであるがー、フランス人であるという誇り、使命を持っているという誇りは、若者を魅了する強大なアメリカ文化を前にも揺らぐことはないのである。一風変わった彼らの粘り強さは明白である。ならば、多くのフランス人が、このグローバル時代の変化を適当にやり過ごし、時には無関心な態度でいるように見えるのは不思議ではないだろうか。ところがフランス人はこうした意識的な粘り強さだけではなく、新しいものに対する受け入れ態勢と意欲も備えているのである。フランスに「de pousser son temps」を必要としたのは、他ならぬde Gaulleであった。これは他の誰よりも国民的過去に恩義を感じている愛国主義者の口から出た驚くべきアピールであった。いや、むしろド・ゴールは既に時代に先んじていたからこそ、新しいものに対するきっかけを生み出すことができたのではなかろうか。例えば1934年、請願書の中で装甲兵器の拡充を要求したのは彼ではなかったか。また1958年、ついに新憲法(もっとも1945年には国会に

提出したかったのであるが)を実現させたのもde Gaulleその人ではなかったか。「Pousser son temps」—このことばの中には、国家の絶対主権という考え方からの決別も含まれていた。今や国家は60年代、70年代の変わり行く状況に適応し、昨日の敵、即ちフランスとドイツが現代の近代化の推進力になることによって、自らを近代ヨーロッパという柱に統合しようとしたのである⁽⁵⁾。ドイツ人の目にとりわけパラドクス的に映ったのは、80年代の社会主義政権による旧国営企業の私有化であった。興味深いことに、かなりの数の国家近代化の発議が、国家自身の手によって起こされたのである。それだけではなく、経済の近代化を促したのも国家であった。と言えば、フランスのハイテクノロジー計画、国土エネルギー需要の5分の4を賄える原子力の民事・軍事活用などが頭に浮かんでくるであろうが、宇宙計画、そしてフランス独自の推進ロケット「Ariane」の開発も忘れてはならない。こうした国家による業績と目標設定はフランス人にとっては何の不思議もないことであった。こうした事業の責任者達は、国民の中からドイツより多くの賛同、そしてドイツよりも少ない潜在的恐怖を見積もることができる⁽⁶⁾。その理由は、フランス人とテクノロジーとの関係—あるいは新しいものすべてとの関係—が、より緩和されたものであって、恐らく我々ドイツ人の場合よりももっと合理的なものだからではないだろうか。我々はすぐに技術の悪魔化に走りがちなところがあり、一時には耳にタコができるのではないかと思える程に口を酸っぱくして—、技術が制御不可能な結果をもたらすことを指摘する。しかしながら、こういった現象こそがフランス人とドイツ人の「唯一の」大きな違いを表していると言えるのではないだろうか。ドイツ人は臆病心の代わりに、もっと平常心を示すことを学ぶべきではないだろうか。この現象は何も技術との付き合い方にのみ限定されるものではなく、我々の歴史、とりわけ最近の歴史との付き合い方についても同様のことがいえるだろう。ドイツ人に必要なことは、冷静な自己理解を深めることである。自身の歴史の模範的価値に対して偏見を持たずに向かい合い、過去の残虐行為から心と目を閉ざしてはいけないのである。我々がフランス人から学ぶことができるもの—それは(この限りにおいて我々はLe Goffのテー

ゼに賛同しなくてはなるまいが)、正しい基準に対する確かな感覚なのである。これはフランス人にとっては日常の中でいともたやすく感じられることであっても、ドイツ人にとっては時としてあまりにも困難に感じられるものなのである。

そして、正しい基準に対するこうした考え方を、驚くべき寛容さと内なる調和の中で備えていらっしゃったのが天羽教授である。教授は、この動乱の時代に指針となるような人生を送られ、日本の学生に生き生きとフランス人気質を教えてくださった。そして学生だけではなく、教授の友好的、積極的な精神は我々にとっても非常に惜しまれるものである。教授が豊かな第二の人生を送られることを心より願うばかりである。

(本稿の日本語の校正にあたって大阪外大の森智子さんにご尽力をいただいた。心より感謝したい。)

注 釈

(1)筆者小論文*Racisme et Violence sous l' Empire*(本誌1997年度)を参照。

その中で筆者は、帝国における偏見の伝達に関する音楽の意味を簡単に述べた。フランス人の現在のドイツ人に対する偏見については、Heusch, P.が1999年、*Frankreich und die deutsche Bedrohung*, dans:『Bonner Rundschau』1999年8月18日(Bonn)の中でリストアップしている。その他、1999年のSorg, A.による*T'es prêt pour l' Europe ?* dans:『Die Zeit』1999年11月11日(Hamburg)も興味深い。

(2)Le Goff, J 1996:*L' Europe racontée aux Jeunes* (Paris)を参照。

(3)複合的なテーマではあるが、ここでは後述の範囲に限定して述べることにする。

(4)Sieburg, F. 1926:*Gott in Frankreich ?* (Hamburg)を参照。

Vichyについては、1998年Altweggによる、最新かつバランスの取れた研究*Die langen Schatten von Vichy. Frankreich und Deutschland und*

die Rückkehr des Verdrängten. (München – Wien)を参照。

「世界における立場」を獲得、確立させようとした日本人の努力との比較研究は興味深い議題となるであろう。このテーマに関する考察は、京都学派の高坂正顕他編『世界における日本の立場』(昭和18年)を出発点にするのが妥当であろう。これはアジアにおける日本勢力拡大をイデオロギー的に根拠づけた最初の書と言えるのではないだろうか。

(5) Berstein, S./Milza, P. 1991: *Histoire de la France au XXe siècle*, tome I et II (Paris)を参照。

(6) これについては特に Harpprecht, K. 1999: *Frankreich. Eine schwierige Liebe* (Reinbek)を参照。この本では従来とは異なる結論が導かれ、若いドイツ人と同世代のフランス人との大きな類似点が確証づけられている。